



令和8（2026）年8月28日

校長だより Vol.7

「同じ星を見て歩いていきましょう！R8⑨」

～「同じ星」を見る私たちの眼差しが、生徒の「生きる力」を育てる～

本校の今年度の重点目標である「あらゆる場面で礼儀正しい挨拶を基本とする」。この一見シンプルで、しかし奥深い目標の向こう側には、生徒たちに一生の財産となる「目配り・気配り・心配り」を身につけさせ、確かな「生きる力」を育みたいという、私たちの強い願いがあります。しかし、挨拶という習慣は、一度できたからといって自動的に定着するものではありません。昨日できていたことが今日は停滞したり、少し質が下がってしまったり、あるいは、見違えるほど素敵な挨拶ができるようになったり…。生徒たちの日常は、常に揺れ動いています。

生徒を本当に成長させるために必要なこと。それは、私たち教職員の「意識」と「関わり方」のアップデートに他なりません。

生徒たちのわずかな変化の波、その「一瞬」を外さずに、すかさず指導・支援の手を差し伸べること。そして、良くなった瞬間を逃さずに心から褒め、認めること。私たちの目線が、常に生徒たちの心の動きにシンクロしていなければ、彼らの本当の成長は引き出せないのです。

ここで、私たち自身の「仕事の向き合い方」についても、少し立ち止まって考えてみたいと思います。

仕事において、私たちは「参加側」にいますでしょうか。それとも「企画側」に立っているでしょうか。

「参加側」の目線：与えられた役割をこなす、流れについていく。

「企画側」の目線：自ら仕掛け、全体を見渡し、先回りして準備や配慮を行う。

先生方はそれぞれ、校務分掌という重要な「企画側」の役割を担っておられます。しかし、日々の忙しさの中で、知らず知らずのうちに「参加側」のような受け身の仕事ぶりになってしまう瞬間はないでしょうか。「参加側」と「企画側」では、求められる「目配り・気配り・心配り」の解像度が全く異なります。私たちが「企画側」のプロフェッショナルとして主体的に動き、細部にまでアンテナを張り巡らせて仕事をする姿。その背中こそが、生徒たちに「目配り・気配り・心配り」の何たるかを教える、最も生きた教材になります。

「あらゆる場面で礼儀正しい挨拶」ができる生徒を育てるために。

まずは私たち教職員が、生徒たちの変化を逃さない「企画者」としての熱い眼差しを持ち、互いの仕事の質を高め合っていきましょう。

私たちの意識が変わる時、学校は変わり、生徒たちは自らの力で未来を切り拓く力を手にするはずです。

先生方にあえて質問です。これらの場面で「参加側」になっていると、私たちの願いは成就しません。

- ① 生徒の『あらゆる場面で礼儀正しい挨拶』は、校外で十分通用するレベルになっているか？
- ② インターハイ、ともえ祭、野球応援などの時期と比べて『挨拶』の質は下がっていないか？
- ③ ①や②の時に、あなたはどのような関りをしていますか？
- ④ 『あらゆる場面で礼儀正しい挨拶』を定着させるために、あなたの具体（行動）を明示できるか？
- ⑤ 授業集団で、クラスで、部活動や様々な場面で、自分の関りは十分だと言えるか？

1. 挨拶の奥にある「三つの心」

私になぜ、ここまで「挨拶」にこだわるのか。それは、形だけの礼儀作法を求めているからではありません。挨拶の根底には、人間関係を豊かにする「目配り」「気配り」「心配り」の三つがすべて凝縮されていると考えるからです。

目配り：周囲の変化や相手の存在に気づくこと。

気配り：相手が今どんな状態にあるかを察すること。

心配り：相手のために自分から一歩踏み出し、声をかけること。

相手を認め、敬意を払う。この一連の心の動きが「挨拶」という形になって現れます。これが自然にできる人は、どんな社会に出ても信頼され、愛される存在になります。

2. 「不易と流行」：世界に通じる名言から学ぶ

『なるほどな〜』と思った、偉人の言葉の中から数点を御紹介します。

「お辞儀をしすぎて腰を痛めた者はいない」 ベンジャミン・フランクリン（アメリカ建国の父・政治家・科学者）

18世紀のアメリカで、外交官としても活躍したフランクリンの言葉です。どれほど時代が変わり、テクノロジーが進化し、グローバル化が進もうとも（**流行**）、人間同士の関わり方の基本にある「謙虚さと敬意」（**不易**）の価値は絶対に変わりません。むしろ、AIやデジタル化が進む現代だからこそ、こうした「泥臭い人間力」の価値が上がっています。

「まごころと「礼儀」を尽くすことは、社会を動かす大きな力となる」 渋沢栄一（実業家・『論語と算盤』著者）

渋沢栄一は、ビジネス（算盤）で成功するためには、道徳や礼儀（論語）が不可欠であると説きました。社会を動かし、自らの人生を切り拓く「生きる力」の近道は、まさに目の前の人への「**礼儀正しい挨拶**」から始まるのです。

「子どもは大人の言うことは聞かないが、大人のする通りにする」 ジェームズ・ボールドウィン（アメリカの作家）

3. 私たちが「背中」で示すこと ～『為す』ことで、『成る』～

生徒たちに「**挨拶をしなさい**」と口で100回言うよりも、私たち教職員が、誰よりも目配り・気配り・心配りある挨拶を生徒たちに、そして同僚たちに示すこと。これ以上の教育はありません。

私たちの明るい挨拶、丁寧な会釈、相手を思いやる一言が、校内に伝播し、やがて生徒たちの当たり前（文化）になっていきます。

この**不易の価値**を、清水西高の新しい「**流行（スタンダード）**」にしていきたいと思います。

生徒たちが、社会へ羽ばたく確かな足腰を鍛えるためには、私たち教職員自身の毎日が、**目配り・気配り・心配り**を実践していなければ『成り』ません。『**為す**』ことで、『**成る**』毎日を積み上げましょう。

